

学校教育におけるボランティアの発達段階 と効果的なアプローチ方法

福田恵子*・高井沙織**

Volunteer's Developmental Stage and Effective Approach in School Education

FUKUDA Keiko*, TAKAI Saori**

キーワード：学校教育，ボランティア，発達段階

Key Words： school education, volunteer, developmental stage

I. はじめに

今日、学校と地域が連携・協働した取り組みや地域資源を活かした教育活動を進め、地域コミュニティの核として学校が役割を果たすことが期待されている。総合的な学習の時間や学校設定科目を活用して、地域協働による体験活動や交流活動のほか、地域の課題解決や活性化に寄与する取り組み^{注1)}もみられ、子ども達の地域理解を深める為ばかりでなく、子ども達が地域の一員として参加し、貢献しつつ、それを通じて学び育つ場として意義づけられている。そのかかわり方としてボランティア的な活動形態をとる場合も少なく、それが地域に必要とされ定着している教育実践も各地でみられる^{注2)}。本研究では、ボランティア本来の市民社会を築く社会力の育成に着目し、学校と地域との連携・協働について論を進めていく。

学校教育でのこのような活動は近年の新たな動向というわけではなく、高等学校家庭科においては、戦後より、CIEの指導によって学校・家庭・地域社会と連携して行なうプロジェクト学習「学校家庭クラブ活動」に取り組んできた経緯をもつ。そこでは、創造・勤労・愛情・奉仕といった基本精神のもと、研究やボランティア活動が実践されてきたのであるが、「自ら進んで社会活動などに無償で参加する」¹⁾奉仕者として推進されてきた。しかし、今日、上記に示したような自己実現や協働的な社会参画的活動としての広がりも少なからずみられるようになっている。

わが国の学校教育全体におけるボランティア活動の導入と推進の経緯は、1977年、厚生省による「学童・生徒のボランティア活動普及事業」に端を発する。1989年の学習指導要領改訂において特別活動での体験的な活動が重視され、1992年には生涯学習の観点からボランティア活動の条件整備の必要性が明示された²⁾。そして1994年、青少年のボランティア活動は豊かな人間性を育むための有効な方途である³⁾として施策を進めることの重要性が提言された。そのような折、1995年の阪神・淡路大震災をきっかけとしてボランティア活動の意義と必要性への国民理解と気運が高まり、1996年の中央教育審議会答申「21世紀を展望したわが国の教育の在り方について」⁴⁾では、学校・家庭・地域社会の役割と連携のあり方を明確にし、ボランティア活動を通して地域社会の一員とし

*鳥取大学地域学部地域教育学科

**赤磐市役所

ての認識を高めることで「生きる力」を育むことが示された。それを受け、1998年に告示された学習指導要領で初めてボランティア活動について明記された。また、2000年の教育改革国民会議の最終報告では奉仕活動に関する提言が出され、2001年6月、学校教育法および社会教育法の一部改正への運びとなった⁵⁾。また、2002年度から完全学校週5日制が始まり⁶⁾、学校・家庭・地域社会が相互に連携しつつ、様々な活動を経験させることを通して、「自ら学び自ら考える力」や「生きる力」を育むことがめざされてきたのである。

しかしながら、自発性が重要とされるボランティア活動が、政策的に学校教育に導入され、進学に関わる評価内容として取り上げられる⁷⁾ことには疑問が残る。2000年の教育改革国民会議当時も多くの反対論が浮上した。一方、上畑⁸⁾は、1996年の中央教育審議会答申は「自分さがしの旅」を扶ける営みとして教育を語り、子ども達が試行錯誤を経ながら様々な経験を積み重ね、自己実現を目指していく学びのあり方を力強く描いたものと解釈し、興梠⁹⁾は、「共に生きる力」の育成においてボランティア活動による学びは深くかわる、すなわち、家族や周囲の人々、地域や社会のために何かをすることで喜びを感じ、他人と信頼し合い協働し合う人間関係を結ぶなかで、よりよい社会の創造と結びついた新しい学びのあり方が追求されなければならないとした。当時から既に15年が経過し、国策上、学校と地域との結びつきはより一層重要性を増してきており、その成果や課題から改めてその意義を問う必要がある。

本研究は、鳥取大学生を対象として、小学期から大学期までのボランティア活動経験について把握するとともに、活動をどのように意義づけてきたのか、また学習者としての立場から学校教育におけるボランティア活動の導入に関する評価について明らかにする。さらに、それらの結果に基づき、ボランティアの本来の意味合いに沿った取り組みへのアプローチ方法について示唆を得たいと考える。

II. 調査方法

1. 調査対象

調査は、鳥取大学の学生を対象として実施した。調査対象の属性を表1に示す。

表1 調査対象の属性

		単位:人(%)	
属性		人	(%)
性別	男性	76	(36.7)
	女性	131	(63.3)
学年	1年	43	(20.8)
	2年	52	(25.1)
	3年	68	(32.9)
	4年	41	(19.8)
	不明	3	(1.4)

2. 調査時期および調査方法

調査は2014年12月に行い、実施にあたっては調査の主旨説明および協力の有無を尋ねた後、小学校から現在までのボランティア活動経験やその当時の意識についてふりかえる形式で回答を求めた。質問紙はその場で回収した。有効回答数207(有効回答率100%)であった。

3. 調査内容

調査内容および評定方法を表2に示す。

(1) ボランティア活動経験および活動のきっかけと自発性

小学校・中学校・高校・大学(現在)それぞれの時期におけるボランティア活動経験の有無を問うと同時に、経験者には、活動のきっかけ(7項目)とその際の自発性の状況について4段階評定で回答を求めた。

(2) ボランティア活動の意義認識

表2 調査内容とデータ化の手続き

調査内容の構成		評定方法
属性	学年	[4カテゴリ] 1)1年, 2)2年, 3)3年, 4)4年
	性別	[2カテゴリ] 1)男性, 2)女性
ボランティア活動経験	(学校段階別: 小学・中学・高校・大学)	[2カテゴリ] 1)ない, 2)ある
活動のきっかけ	(学校段階別: 小学・中学・高校・大学)	
	学校の授業の一環	[2カテゴリ] 1)ない, 2)ある
	学校のクラブ活動	[2カテゴリ] 1)ない, 2)ある
	学校でのその他の活動や紹介	[2カテゴリ] 1)ない, 2)ある
	町内会活動	[2カテゴリ] 1)ない, 2)ある
	子ども会活動	[2カテゴリ] 1)ない, 2)ある
	地域の任意団体に所属して活動	[2カテゴリ] 1)ない, 2)ある
	自らの関心から情報収集して参加	[2カテゴリ] 1)ない, 2)ある
活動の自発性	(学校段階および活動のきっかけ別)	[4段階評定] 1)自発的でない, 2)あまり自発的でない, 3)やや自発的, 4)自発的
活動の意義認識	(学校段階別: 小学・中学・高校・大学)	
	自分のため	[4段階評定] 1)思わない, 2)あまり思わない, 3)少し思う, 4)思う
	社会のため	[4段階評定] 1)思わない, 2)あまり思わない, 3)少し思う, 4)思う
	色々な人との出会い	[4段階評定] 1)思わない, 2)あまり思わない, 3)少し思う, 4)思う
	活動内容への興味	[4段階評定] 1)思わない, 2)あまり思わない, 3)少し思う, 4)思う
	活動の楽しさ	[4段階評定] 1)思わない, 2)あまり思わない, 3)少し思う, 4)思う
	社会的な評価	[4段階評定] 1)思わない, 2)あまり思わない, 3)少し思う, 4)思う
	日常生活の変化	[4段階評定] 1)思わない, 2)あまり思わない, 3)少し思う, 4)思う
今後の活動意欲	[2段階評定] 1)活動したいとは思わない, 2)活動したい	
学校教育でのボランティア活動導入に関する意識	[4段階評定] 1)よいと思わない, 2)どちらかといえばよいと思わない, 3)どちらかといえばよい, 4)よい	
ボランティア活動導入に適した学校段階	[4カテゴリ] 1)小学校, 2)中学校, 3)高校, 4)大学	

石本¹⁰⁾によるボランティア開始時の動機に関する項目および柴田ら¹¹⁾によるボランティア活動動機に関する項目をもとに7項目を設定した。各学校段階ごとに、活動経験者を対象として、7項目それぞれについて4段階評定で回答を求めた。

(3) 今後のボランティア活動への意欲

大学時（現在）において、今後のボランティア活動への取り組み意欲の有無を問うた。

(4) 学校教育におけるボランティア活動導入に関する意識

学校教育の一環としてボランティア活動を取り入れることへの評価を4段階評定で回答を求めた。

(5) ボランティア活動導入に適した学校段階

学校教育の一環としてボランティア活動を取り入れるとすれば、小学校・中学校・高校・大学時のいずれの段階が適切と考えるか、回答を求めた。

4. 分析方法

【分析1】ボランティア活動経験、活動のきっかけと自発性、活動の意義認識の把握

ボランティア活動の経験の有無と活動のきっかけ、参加時の自発性意識、意義づけについて、学校段階別に把握し、その変容と各期の特徴を明らかにする。

【分析2】学校教育におけるボランティア活動の評価の把握

ボランティア経験者による学校教育へボランティア活動導入に関する評価と適切と考える学校段階について把握する。

【分析3】ボランティア活動の継続意欲にかかわる要因の分析

今後のボランティア活動への意欲に関わる要因を、学校段階別に、活動のきっかけと活動の意義認識との相関分析によって明らかにする。

これらの3つの分析を通して、ボランティアの発達段階について明らかにするとともに、各段階における効果的なアプローチ方法について考察する。

III. 結果および考察

1. 各学校段階におけるボランティア活動経験と活動のきっかけ

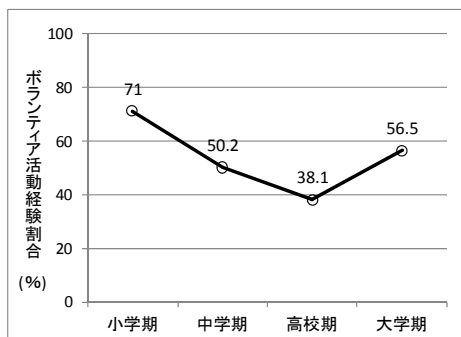


図1 ボランティア活動経験の状況

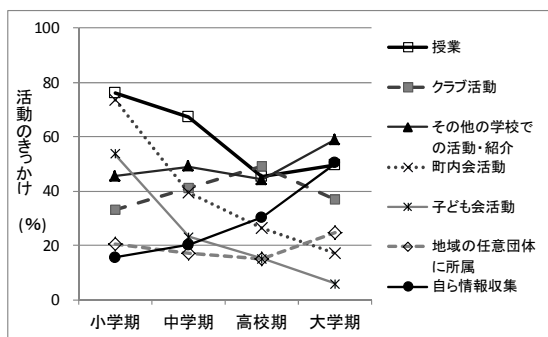


図2 活動のきっかけ

図1に各学校段階でのボランティア活動の経験状況, 図2に活動のきっかけについて示す。活動経験者は, 小学期71%, 中学期50%, 高校期38%と次第に参加割合は減少し, 大学期で56%に増加する現状にあった。

活動に参加するきっかけは, 小学期では, 学校の「授業」の一環(76.2%)での参加や「町内会」(73.5%)や「子ども会」(53.7%)といった地域での取り組みとして参加している場合が多い。中学期になると, 地域での活動に参加するケースは減じ, 「授業」(67.3%)や「その他の教育活動や教師からの紹介」(49.0%), 「クラブ活動」(41.3%)といった学校を介して参加するケースが主体となっている。高校期では, 中学期と同様に学校教育での機会が主ではあるものの, 「クラブ活動」(49.4%)として参加する割合が高まり, 「授業」(45.6%)や「その他の教育活動・紹介」(44.3%)をきっかけとする場合は少なくなっている。さらに, 「自らが情報収集」して参加する割合(30.4%)も増加しており, 内発的な動機づけによって参加するケースが増えている。大学期では, 大学での「教育活動や紹介」(59.0%), 「授業」(49.6%)に加え, 自らの興味・関心に基づく「情報収集」(50.4%)による参加が多くなっており, 一層, 内発的な動機づけによる参加へと移行していることがわかる。

2. ボランティア活動のきっかけと自発性

次に, 学校段階ごとにボランティア活動のきっかけと自発性との関連についてみていく。図3を参照されたい。活動への自発性は, 学校段階が進行するにしたがって高まる傾向がみられる。どの学校段階でも主なきっかけとなっている「授業」であるが, 他のきっかけに比べると自発的に活動している者の割合は低い(小学期50.0%, 中学期45.7%, 高校期52.8%, 大学期70.7%)。特に, 中学期では半数以上の者が自発的に取り組めていない状況がうかがえる。一方, 授業ではない学校での「他の教育活動や教師からの紹介」で参加した者は, どの学校段階においても自発的活動者が多いことがわかる(小学期62.7%, 中学期78.4%, 高校期82.9%,

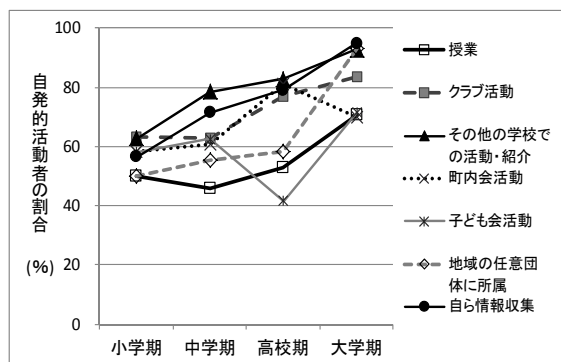


図3 活動のきっかけ別：自発性の状況

大学期 92.8%)。

学校段階別にみると、小学期では、地域での取り組みをきっかけとして活動する場合が特徴的であったが、6割程度（「町内会活動」58.3%、「子ども会」58.2%）の者が自発的に参加しており、学校での「授業」よりも自発的活動者の割合は高くなっている。次に、中学期では、「自ら情報収集」して自発的に取り組む者が増加し（71.4%）、高校期では、それに加えて「クラブ活動」で自発的に参加する割合（76.9%）も増加する。大学期になると、自らの自発性に基づいて「情報収集」して参加し（94.9%）、学校での教育活動や紹介された活動（92.8%）や地域の任意団体（93.1%）に所属するなどして活動していることがわかる。

3. ボランティア活動の意義認識

それでは、ボランティア活動への取り組みの中でその意義はどのように認識されてきたのであろうか。学校段階によって意義づけは異なっているのであろうか。図4は、活動の意義として考えられる7項目について、学校段階別に「思う」および「少し思う」と肯定的に回答した者の割合を示したものである。

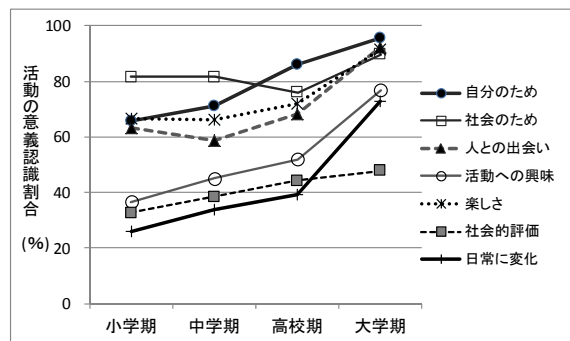


図4 活動の意義認識

小・中学期においては、主としてボランティア活動は「社会のため」（小学期 86.6%、中学期 86.7%）と意義づけているが、高校期からは「自分のため」（86.1%）という認識が強くなり、大学期では、「自分のため」（95.7%）、「人との出会い」（92.3%）、「楽しさ」（91.5%）、「社会のため」（89.7%）といった複数の意義づけのもとで活動していることがわかる。小・中学期では、「授業」をきっかけとした活動が多いことからすれば、教師によって社会や他者への貢献を活動目的として意識づけられ、取り組んでいる様子をうかがうことができる。高校期では、「クラブ活動」や「授業外の教育活動や教師からの紹介」といったきっかけで行っている場合が多くなることから、生徒自身がその活動の意義づけを行い、活動を通して自分の成長や変化を実感するようになって考えられる。大学期になると、「自分のため」に加えて「社会」貢献も意識され、人との「出会い」や活動そのものに「楽しみ」を見だし、さらには自らの「日常に変化」（72.6%）を得るといった意義も意識され、自らの生き方のなかに活動を位置づけて取り組んでいることがわかる。以上に加えて、活動に対する「社会的な評価」が得られることを価値づける者の割合が、学校段階が進むにつれてゆるやかに高まる（小学期32.7%、中学期38.5%、高校期44.3%、大学期47.9%）ことが明らかとなった。他の項目と比較してその割合は高くないものの、1/3～1/2の者が活動に対して社会的な評価を求め、学校段階の進行とともにそのニーズが高まることは重視すべき点であろう。

4. 学校教育におけるボランティア活動導入の評価と適切な学校段階

図5は、小学期から大学期までいずれかの時期にボランティア活動を経験している者（89.8%）とこれまで全く経験していない者（9.2%）別に、学校教育におけるボランティア活動の導入の是非について問うたものである。

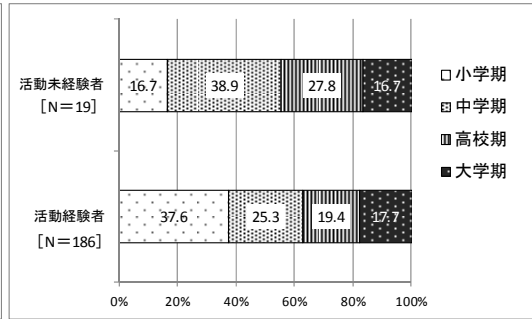
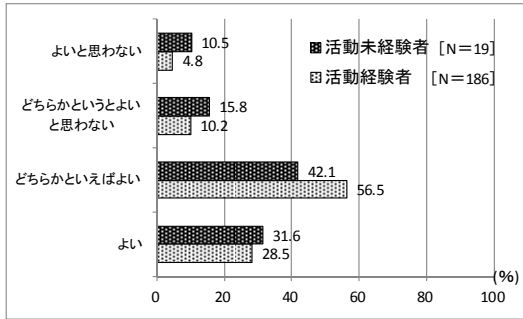


図5 学校教育でのボランティア活動導入への評価

図6 ボランティア活動の適切な導入時期

概して、活動経験のある者の方が、学校教育においてボランティア活動に取り組むことについて肯定的に評価していると考えられるが、「どちらかというよい」とする者の割合が高いことからすれば、さほど明確な意識のもとで評価しているわけではないと推察される。この結果は、学校教育におけるボランティア活動の多くは授業の一環として取り込まれており、約半数が自発的に取り組んでいないこと、しかし自発的ではないからといって活動に意味を見いだせないわけでもないといった意識が反映されていると考えられる。

次に、ボランティア活動の導入に際して適切と考えられる時期について示したものが図6である。これも活動経験の有無別に示しているが、経験者の約4割が小学校段階で取り入れるのがよいと考えているのに対し、未経験者の多くは中学校から高校段階での導入が適切であると考えている。このことは、ボランティアの自発性や活動への意味づけが主体的にできるようになる発達段階を考慮して回答されたものと推察される。そうだとすれば、活動経験者からすれば、自発的・主体的とはいえない取り組みであっても、早期から活動の機会が与えられることに何らかの意味を見いだしていると思われる。この意識には、未経験ゆえ論理的に意義づける者とは異なった経験上からくる評価が加味されていると考える。

5. ボランティア活動の継続要因

ボランティア活動経験者の79% (147名) が今後のボランティア活動への意欲を示したが、活動を継続する意欲は、これまで経験したどのような要因によって規定されているのだろうか。ここでは、各学校段階における活動のきっかけおよび意義づけとの関わりから検討する。表3は、それらの相関係数を示したものである。小・中学期では授業外の教育活動や教師の紹介と弱い関連が認められたものの、概して、活動への意欲は、活動のきっかけというよりもむしろ活動の意義をどのように認識しているかによ

表3 活動のきっかけ・意義認識と今後の活動意欲との関連 (相関係数)

	小学期 [N=147]	中学期 [N=104]	高校期 [N=79]	大学期 [N=117]	
活動のきっかけ	授業	-0.008	0.113	-0.010	-0.001
	クラブ活動	-0.042	-0.035	0.085	0.019
	その他の学校での活動・紹介	0.204 *	0.268 **	0.104	0.063
	町内会活動	0.113	0.126	-0.035	0.010
	子ども会活動	-0.027	0.051	-0.053	0.082
	地域の任意団体に所属	0.118	0.101	0.125	0.198 *
	自ら情報収集	0.051	0.025	-0.027	0.059
	活動の意義認識	自分のため	0.302 **	0.363 **	0.246 *
社会のため		0.174 *	0.273 *	0.249 *	0.264 **
色々な人との出会い		0.099	0.150	0.315 **	0.351 **
活動内容への興味		0.402 **	0.421 **	0.318 **	0.441 **
活動の楽しさ		0.376 **	0.294 **	0.269 *	0.217 *
社会的な評価		0.187 *	0.296 **	0.203	0.177
日常に変化		0.201 *	0.291 **	0.172	0.258 **

注) *p<0.05, **p<0.01

ると考えられる。

小・中学期は、ともに同様の傾向がみられ、活動に興味をもち、楽しんで活動できること、また、それが社会のためだけでなく、自分自身にとって意味を感じられ、普段の生活が変化するような気持ちになれること、そして、活動に対して社会的な評価が得られることによって、次なる活動への意欲が引き出されると考えられる。高校期以降になると、興味ある活動で、そこでの人との出会いが継続要因となっていると考えられる。そして大学期では、活動が社会的に評価されることよりも活動が自分自身のためになり、生き方に変化が得られることが活動の意義として捉えられ、活動への意欲づけになっていることがわかる。

IV. おわりに：ボランティア活動の発達過程と効果的なアプローチ方法

本研究の目的は、学校と地域との連携が一層重視され、学校が地域コミュニティの保持・再生の核として機能することが求められるなか、「生きる力」の育成をねらいとして取り組まれているボランティア活動の発達過程を学習者の評価から明らかにすること、さらに、その結果をもとに学校教育におけるボランティア活動のアプローチ方法への示唆を得ることである。図7および以下に結果をまとめる。

(1) 小学期から大学期において、9割の者がボランティア活動を経験しており、そのうちの約8割は学校教育におけるボランティア活動を肯定的に評価しており、今後の活動への意欲をもっている。導入時期については、活動経験者の4割が小学校段階からの早い時期からの取り組みが適切だと考えている。

(2) ボランティア活動に参加するきっかけは、すべての学校段階で学校での教育活動にかかわるものが主であるが、学校段階が進むにつれて、授業外での教育活動やクラブ活動、自らが情報収集して参加するなど、内発的な動機づけによる参加へと移行する。

(3) ボランティア活動の意義づけは、小・中学期では「社会のため」と認識されているが、高校期頃から「自分のため」という認識が高まり、大学期になるとその両方が意識されるようになる。同時に、「他者との出会い」や活動そのものに「楽しみ」を感じ、生活に「変化」を得るといったように、自らの生き方のなかに活動を位置づけ、多様な意義づけのもとで取り組むようになる。

(4) 今後のボランティア活動への意欲は、活動のきっかけよりも活動の意義認識と関わっている。小・中学期では、活動への興味、楽しさ、自分にとっての意味づけに加えて、活動が社会的に評価されることが有意な要因と考えられる。高校期以降では他者との出会いに価値を感じることや、大学期では、それに加えて自分自身の生き方に変化を得られる実感で活動が継続される。

		小学期	中学期	高校期	大学期
		【認知期】	【経験期】	【実践期】	【生活者としての実践期】
ボランティアの発達段階	活動のきっかけ	学校の授業			
		町内会活動		学校での授業外活動や紹介 クラブ活動	自らの情報収集
活動の意義認識	経験者の主たる認識	社会のため		自分のため	
				人との出会い 楽しさ 社会のため	
	活動意欲と関連する認識	活動内容への興味			
		自分のため			
	楽しさ				
	社会的評価		人との出会い		
	生活に変化		生活に変化		

図7 学校教育におけるボランティアの発達過程

図7は、学校教育におけるボランティアの発達過程を調査結果からまとめたものである。ボランティア活動を従来型の奉仕活動と捉えるのであれば、どの学校段階でも十分に組み組める課題であろう。しかしながら、ボランティア本来の意味合いに立って、よりよい社会の創造とむすびついた新しい学びとして捉えた時、図7に示したような発達段階がみえてくる。金子¹²⁾は、ボランティアについて次のように述べる。「ボランティアは、何らかの困難な状況を『他人の問題』として自分から切り離れたものとはみなさず、自分も困難を抱える一人としてその人に結びついているという『かかわり方』をし、その状況を改善すべく、働きかけ、『つながり』をつけようと行動する人である」「その状況の改善に向けてネットワークを作ってゆくネットワークである」つまり、ボランティアがボランティアたる2つの条件—①「自分とのかかわり」で行動しており、②「他者に働きかけ、協働する力」によって解決に向かう—ということである。そうした時、よりよい社会の創造と結びついた活動が実際に可能となる段階は、「他者との出会い」が意識され、活動の継続意欲と結びついている高校期からと考えられ、この時期を【実践期】とした。つまり、“実践：行動を通じて、自分が生きている環境を意識的に変化させる”¹³⁾ 基盤の整った段階である。そして大学期では、大半の学生が自立した生活を送るようになり、生活者としての視点や意識のもとで自らの生き方や生活の変化を意図した取り組みになっていることから、【生活者としての実践期】とした。小学期と中学期は、これらの実践期に至る前段階として位置づけることができる。小学期は、自らの関心で自らの生き方とかかわって活動を認識し実践することをねらいとするには難しい段階であると考えられる。しかし、学校や地域で提供される活動への参加によって、「社会のために」自分が貢献することの意味を感じているのは事実である。またボランティア経験者の多くが小学校段階からの活動が適切であると評価している。それは、実践に先立ち、活動への参加を通じてボランティアについて【認知する(知る)】ことが初期段階として重要であるという経験的認識にもとづいた評価であると考えられる。そして、中学期になると、活動に対する自発性や主体性が芽生え、活動が自らの生活に何らかの変化をもたらすことも意識されてくる時期であることから、よりよい社会の創造へとむすびつく活動の【経験期】とすることができる。つまり、“経験：外界との相互作用の過程を意識化し自分のものとする活動期”¹⁴⁾ である。

以上をふまえて、学校教育におけるボランティア活動の取り組みへのアプローチ方法についてまとめる。各学校段階における取り組みへの効果的なアプローチ方法は、表3に示した「活動意欲と関連する意義認識」に着目するということである。小・中学期では、活動への興味・関心をもたせ、楽しみながら組み組める工夫、そして、活動のふりかえりを自分自身のかかわりのなかで考え、認識させることが重要である。そして、小・中学期では純粋に社会のため、他者のためという目的のもとで活動していることから、活動に対して社会からの評価(例えば、学外で発表する、活動が新聞に掲載される、お礼状が届く等)が直接的に児童・生徒に還元されるよう教師自身が仕込んでおくことも必要であろう。高校期では、活動を通じた他者とのふれあいや協働的な取り組みを充実させる工夫が必要である。しかし、それを楽しみながら実践できるためには、学校と地域との信頼関係が構築されていることと、地域側の十分な理解と取り組みをサポートする受け入れ体制づくり、基盤づくりが活動に先立って重要な要件となる。

学校教育におけるボランティア活動の導入に関しては、2つの懸念のもとで推進されてきた。一つは、ボランティア本来の自発性に関する問題、もう一つは奉仕活動に終始しない市民社会を築くための社会的力の育成としての活動である。本研究より明らかになったボランティアの発達過程か

ら、学校段階の進行とともに自発性は次第に向上し、大学期には自発的主体的行為までに成長している。また、後者の問題についても、高校期より十分にその課題に取り組める素地が育成されていることから、活動を支える学校と地域との連携や基盤的な体制づくりがなされることによって、十分に取り組める状況にあると考えられる。

注

- 1) 岡山県立林野高校：マイドリームプロジェクト，島根県隠岐島前高校：離島の特性を活かした島おこし，岐阜県可児高校：可児エンリッチ・プロジェクトなど。
- 2) 鳥取県内での一例：日南町立日南小学校と日南中学校（統廃合され，現在いずれも町内で唯一の小・中学校となっている）では，連携して，ふるさと学習の一環として小学生と中学生と一緒に児童・生徒の住居のある地域の高齢者宅を敬老の日に訪問し，手紙を渡す取り組みを行っており，各区域ごとにまちづくり協議会がそのサポートを行っている。

引用および参考文献

- 1) 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫. 『岩波国語辞典』. 岩波書店 (1963)
- 2) 生涯学習審議会答申. 今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について. 平成4年7月
- 3) 青少年問題審議会意見具申. 豊かさやゆとりの時代に向けての青少年育成の基本的方向－青少年期のボランティア活動の促進に向けて. 平成6年3月
- 4) 中央教育審議会答申. 21世紀を展望したわが国の教育の在り方について〔第一次答申〕. 平成8年7月
- 5) 文部科学省. 学校教育及び社会教育における体験活動の促進について (13文科初第597号). 平成13年9月
- 6) 中央教育審議会答申. 21世紀を展望したわが国の教育の在り方について〔第二次答申〕. 平成9年6月
文部科学事務次官通知. 完全学校週5日制について (13文科初第1000号). 平成14年3月
- 7) 文部科学事務次官通知. 高等学校の入学者選抜について. 平成5年2月
- 8) 上畑良信. 大学の教育課程と学生のボランティア活動－その教育的意義と若干の具体的方策－. 長崎県立大学論集第40巻第1号. 57-80 (2006)
- 9) 興梠寛. ボランティア学習における評価の概念. 日本ボランティア学習協会編『小・中・高等学校・大学におけるボランティア学習の評価のあり方についての調査研究報告書』. p. 18 (1999)
- 10) 石本雄真. 大学生のボランティア活動の動機. 日本青年心理学会大会発表論文集(12). 40-4 (2004)
- 11) 柴田和子・大東貢生・大山治彦・古川秀夫. ボランティア活動の動機における自発性と外発性. 国際社会文化研究所紀要第6号. 119-131 (2004)
- 12) 金子郁容. 『ボランティアもうひとつの情報社会』. 岩波書店 (1992)
- 13) 新村出編. 『広辞苑 (第六版)』. 岩波書店 (2008)
- 14) 前掲書 13)

(2015年10月2日受付, 2015年10月6日受理)